

研究者氏名：芳金 秀展

調査・活動テーマ：半田市における中心市街地観光の大ナゴヤ大学的アプローチ

調査・活動の目的

当初の目的は、市民が「学ぶ」という機会を通して、街を知り、街を好きになる大ナゴヤ大学という活動を通し、半田市の中心市街地や周辺の観光施設を活性化させる試みを実施する予定ではありましたが、調査を進めるうえで半田市の中心市街地の現状や行政の計画、検証に課題を感じたため、国内外の市街地の活性化事例を調査し研究することで行政への提言をまとめることを目的としました。

調査や活動の取組内容および達成状況・成果内容

<取組内容>

- ・半田市中心市街地活性化基本計画（平成 21 年作成）の精読と行政担当部署への聞き取り調査
- ・地方創生☆RESAS 地域セミナー2016 への参加
- ・文献調査

- ① 観光学入門 岡本伸之 有斐閣アルマ
- ② 本当に住んで幸せな街 島原万丈+HOME's 総研 光文社新書
- ③ 平成 25 年度中心市街地商業等活性化支援業務報告書 経済産業省 商務流通保安グループ中心市街地活性化室
- ④ 中心市街地活性化指標の検討 -通行量調査を代替もしくは補完する新しい方法について- 鈴木英之 合同会社ファイン・アナリシス
- ⑤ 観光地域経済の「見える化」の推進事業観光庁

<達成状況・成果内容>

半田市における駅前を中心市街地は、区画整理とビルの建設による街の再開発が施され 12 年経ちますが、印象として綺麗になったが寂しくなったという状況にあります。ビルの 1, 2 階のリニューアルオープンが 29 年 3 月 31 日控え、期待が高まるとともに、区画整理された街に行政として、市民として何を求めていくのか改めて計画と実行に移るべきタイミングであると考えます。

そこで、平成 21 年に定められた半田市の中心市街地活性化基本計画の目標年であった 26 年から 2 年経ち、継承した新しい目的と目標を掲げ、基礎データを元に新しい実行計画が必要です。本研究では

その際に必要となる新しい指標の導入に、国内外の事例をもとに考察した私なりの答えを提案しました。

結論としては、① 21 年策定の半田市中心市街地活性化基本計画内で扱われている指標である、交通量調査や 1 世帯当たりの同居人数、観光名所の入場者数は計画や施策を考えるうえでのマーケティングデータとして扱うべきで目標数値として扱うべきではない。② 新たな指標として、定性的で感覚的な行動を調査し数値データ化する指標を取り入れ定期的に調査する。③ それにより、中心市街地の持つポテンシャルを基礎データとしてオープンにし、不動産や企業、小売業などの進出を促すとともに、住民としてどんな街にしていきたいかという住民主体の街づくりが進められる。

以上の 3 点を半田市の方に報告させていただきたく思っています。

優れた効果・成果があがった点

今回の研究により、活性化や賑わいなど抽象的な言葉では街づくりはできない。観光というのは経済活動であり、交流人口が増えただけでは経済は動かず富の流入も行われぬ。行政だけがまちづくりに取り組んでいても、魅力的な街にはならないし、きれいに区画整理され、明るくなっても住民は減っていくという現実を目の当たりにし、いかに街として多様性を受け入れ経済的に自立していくのが今後の課題としてとらえることができました。

本学学生・教職員との関わり

今回は、C ラボ半田の池脇様、半田市観光協会の松見様に多様なアドバイスを頂き誠に感謝しております。学生の方々とは接点を見出すことが出来ませんでした。福祉や経営といった視点も踏まえ今後も研究を継続していきたいと考えています。

委嘱期間終了後の今後の展望

まち会社のような会社を設立し、街づくりにおける基礎データの調査等を継続して行っていく所存です。